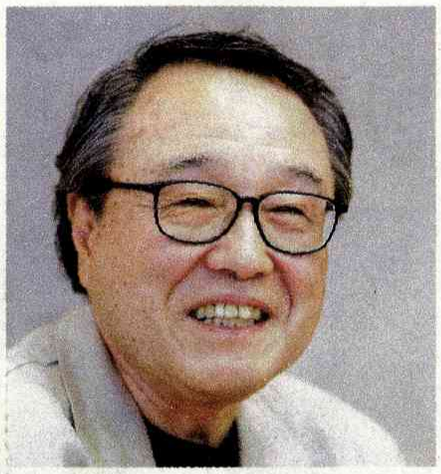
いま風　金曜日

言葉のアルバム

本流に乗らず自力で

長尾 みのるさん

イラストレーター



撮影・竹田津敦史

ながお・みのる　1929年、東京都生まれ。50年、早大工芸美術研究所を卒業。53年から世界一周の旅に出る。帰国後の57年、永六輔の連載小説の挿絵を担当し、「イラスト」という略称を考案する。小説のイラスト、本の装丁、レコード・CDジャケットなどを多数手がける。近著に『バサラ人間』（復刊）、『長尾みのるの人間イラストーリー』など。

イラストレーターになって半世紀を超える。ひょうひょうとして温厚な現在の人柄からは想像しづらいが、若き日には、熱を帯びたように大胆な旅に出たことがある。

戦後、舞台美術を志していた頃に、美術界への挑戦的な活動で注目されていた岡本太郎と出会い、「新しいと感じた時はもう古い！」という言葉に刺激を受けた。「世界を見なければ」との思いに駆られ、日本が独立を回復してまもない1953年、ブラジル行きの貨物船に乗り込んだ。

外貨の持ち出しは禁じられていたため、北中米経由でブラジルに着いた時には無一文。絵を描いては各地の富豪に売り歩く放浪生活が続いた。

絵は売れ、生活には困らなくなったが、将来の展望はない。不安を抱き始めたある日、「川の奥地の密林に面白い日本人が住んでいる」と教えられ、訪ねてみた。

かつてはパリの日本大使館に勤めていたというその人に不安を打ち明けると、「学生時代の恩師の作だが」と、この句を教えられた。

＜流されて流れて春を
水澄まし＞

「世の中に流される時があってもいい。ミズスマシのように、流されているようでも、ここぞという時に自力で泳げばいい。悩むことはないよ」

画・福間明子

そう言われて心が落ち着き、行雲流水の境地で旅を続けた。

その後、憧れだった欧州に渡り、さらに客船でスエズ運河を通って帰国した。出発から3年以上が過ぎていた。

海外旅行者も珍しい時代に、無銭旅行での世界一周という快挙は脚光を浴びた。帰国後はアート・ディレクターを名乗り、本や雑誌のデザインを手がける。放送作家だった永六輔に頼まれて連載小説の挿絵を描いた時、肩書を「イラストレーター」としたら、それが広まり、職業名として定着した。

そんな時代の花形となった時にも、心がけていたことがある。

「世の中の本流には、乗らないようにしていた。本流に乗ってしまうと、自分の力では泳げなくなる。だから、僕はどこの団体にも所属したことがないんです」

以来、イラストを中心に活動し、80歳を超えた今も現役。最近は電子出版にも携わる。

昨年秋、自転車で転倒して右手首を骨折した。利き腕のケガは死活問題のはずだが、「意外とあわてなかった」という。

「これは何か別の方向を考えろという忠告かな、と左手で描く練習をしてみた。けっこう味のある絵が描けるんです」

幸い40日ほどで全治したので左手の出番はなかったが、流れに逆らわない生き方は健在だ。

（文化部　片山一弘）